

4 未来へつづく叛乱

体制史をトータルに分析してみせた『科学の社会史——近代日本の科学体制』（一九七三年、中央公論社）などの広重の名著を含めて、彼の仕事をそれなりにまとめて追いかけてみたのも、その時代であったのだ（注3）。

小熊英二の大部な著作が、よく売れたということも大きな契機になったのであろうか、（一九六八年）をテーマにした本が、この間かなり出版され続けてきた。私は、それらのいくつかに眼を通してきたが（注4）、今、私がここで執着している問題にこそこだわって、六〇年代から今日までの問題を整理して論じている著作がある。高草木光一編の『一九六〇年代 未来へつづく思想』（二〇一二年、岩波書店）がそれである（注5）。

著者はそこに収められている「一九六〇年代から考える」で、こう論じている。

「ベトナム戦争に対して起こった世界的な反戦運動は、近代文明そのものに対する懐疑を生み出します。世界最大の軍事力と経済力をもつアメリカ合衆国がアジアのちっぽけな農業国に対して、何の大義もなくしかも残酷な殺戮をくり返したことは、アメリカの軍事行動に対する不信にとどまらず、アメリカに代表される現代文明そのものに対する懐疑を生み出すことになったわけです。／ベトナム戦争

に敏感に反応したのは、アメリカではまずは徴兵の可能性のある若い世代でした。その反戦運動は、世界的な規模で起こった若い学生たちの大学改革・解体運動とも連結していきます。いわゆる『スチューデント・パワー』の嵐が、アメリカでも、ヨーロッパでも、日本でも吹き荒れました。日本では医学部処分問題に端を発する東大闘争、二〇億円以上の使途不明金問題で沸騰した日大闘争などが熾烈を極めました。発火の原因はさまざまですが、文明の先端にあつてその『粹』を生産する大学という場において、『権力』と『知』の癒着構造が明らかになりました。もはや授業料値上げや学生処分という個別の事柄が問題なのではなく、学問のあり方、大学のあり方、つまりは文明のあり方が根底から問われることになったのです」。

編者は、この本のモチーフについては、自分もかろうじて端にひっかかった一九六〇年代から五〇年以上が過ぎ、「関係者も当然のことながら年齢を重ね、鬼籍に入った方々も少なくありません。『主体』自らが語るべき『主体』の歴史は、おそらくいまがその限界に来ているように思われます」と語っている。

運動「主体」自身が語る、六〇年代以降の運動史（プライベート・ヒストリー）をふまえた「一九六〇年代思想」という、この編者の意図は、十分に貫徹されており、本書のその点は、他の（一九六八）本にはない魅力をたたえ

ている。

語り手は四人である。反戦平和運動一筋に生き続けている、「ベ平連」の事務局でもあった吉川勇一（一九三二年生まれ）。水俣病問題に一貫して取りくんできた医師の原田正純（一九三四年生まれ）、東大闘争時は「助手共闘」のメンバーとして、「ノン・セクト・ラディカル」の元祖ともいわれ、生物学から「独自の『いのち学』」へと思考と行動の歩を続けている最首悟（一九三六年生まれ）、もう一人は、科学者の社会的責任を問うという視角から、高木仁三郎とともに反原発運動のリーダーとして活躍し、高木の死後も長く活動し続けている山口幸夫（一九三七年生まれ）。

世代的にいえば「全共闘」世代とはいえず、一世代からそれより上の世代の人間の語りである。しかし吉川以外の三人が自然科学畑の人間である点が、本書全体のユニークさを支えている。その事が、あの時代の叛乱が問うた意味を、その前後の歩みを通して、より鮮明化させようという編者のモチーフにふさわしい内容を提示させることを可能にしているのだ（もちろん吉川のヒストリーも、それはそれで読みごたえのあるものであることは言うまでもないが）。

六〇年代後半から七〇年代への時間の中での三人の発言を、少しつづつ示そう。

「一九六八年に、厚生大臣がいわゆる『公害認定』を行

います。これではじめて公害が公になったわけです。私はこのときに水俣に行っていて、水俣の患者さんたちがこの公害認定を歓迎している様子を不思議に思いました。水俣病の原因はチツソの垂れ流した有機水銀による中毒ということはとっくの昔からわかっているのに、どうしていまさら大げさな政府認定をするのかと文句を言ったら、患者さんたちにたしなめられました。『先生、医学が水俣病の原因はチツソの有機水銀だと言っても、それでは不十分で、やっぱり国がきちんと認めてくれることが必要だ』といわれて、私は『なるほど』と思いました」。

「チツソの主張は、水俣病の前に水俣病はなかった、予想できないことは予防のしようがない、という『予見不可能性』でした。それに対して、企業は安全を確認したうえで流すべきで、安全かどうか分からないものを流したことが問題だという『安全性の考え方』を判決は採っています。これは、今後のさまざまな問題を考えるうえで有効な判断です。エイズにしても、肝炎にしても、危険だとわかったときにはもう手遅れなのです。もちろんその論理は、富樫貞夫先生（熊本大学名誉教授）たちが水俣病研究会で議論してつくりあげたことが基礎になっていると思いますが、それを裁判所がきちんと認めたことは大きな意味があると思います」。

「私は水俣病を五〇年、三池の事故も四〇年追いかけて

した。他に一〇年めにまとめた報告はありますが、こんな長期的なものには世界中にはありません。天才的な人がバツと閃いて研究成果を上げることもあるでしょうが、私は天才ではないので、長くしつこく追い続けた。しかし、四〇年も追いかけたら世界一になります。一酸化炭素中毒は、練炭で自殺するぐらいですから、日常的にどこでもあります。ところがどんなに探しても、一〇年以上追跡した例が世界中にない。しかも、三池炭坑の事例では、多くの被害者がいろいろな条件でガスを吸わされているので結果的に人体実験をしたような貴重なデータとも考えられるのです。「水俣と三池」原田正純。

原田の主體的で執念深い追跡のスタートも、六〇年代という時代の空気の中で生まれたものであろう。

東大闘争をくぐってから水俣病問題にかかわりだした最首は、こう語っている。

「安保闘争のあと『三無主義』、つまり無関心、無気力、無責任がはびこる静かな大学のなかで、ベトナムが関心の中心になっていきました。ベトナムを問題にすると、戦前、戦中、戦後の日本がやってきたことの検証はまだ終わっていないという反省が強いのしかかってきます。加えて山口二矢像も含めて一人で闘うという発想がありました。理工系の学生で反ベトナム戦争、反米、反核をスローガンにした『ベトナム反戦会議』をつくることになります。これは『会

最首たちの「ベ平連」に感じた違和感は、六〇年代末に私たちの持ったそれと、かなり近い。その点はともかく、アメリカから輸入された産・軍・学（知）協同の巨大科学システムへの叛乱の時代のはじまりがここにあったことは、この証言から読めるはずである。山口幸夫も、こう語っている。

「私がアメリカに行っている間に、日本では『ベ平連』ができ、日本物理学会の米軍資金導入事件が起きています。本郷の東京大学へ戻ってきましたと、すぐに安田講堂封鎖という出来事にぶつかりました。その動向は、アメリカについても薄々は知っていました。『大学は真理探究する場である』と標榜する大学当局が、医学部生を不当に処分したことで学生が反乱を起こし、東大闘争が始まったのです」（三里塚と脱原発運動）。

山口は、そこで六〇年代という時代の大きな特徴について、こう述べている。

「私たち、つまりほぼ同学年で、化学や物理学を志した高木仁三郎さん梅林宏道さんや私たちにとって、六〇年代には三つの大きな特徴があったと思います。一つは『黄金の六〇年代』と言われるほど、『科学技術』が盛んな時代でした。その分野にだけ目を向けて熱中していれば、すっかりそのなかにはまってしまうって、満足で快適な研究生活、社会生活を送ることができたことはたしかです。しかし、

議』ですから組織ではなく、一人で闘うという意識を示しています。／ベ平連（ベトナムに平和を！市民連合）に対抗する気概ももっていました。ベ平連は、吉川勇一にしても小田実にしても、ちよつと『おじさん』で、ジェントルマン、インテリゲンチヤが中心にいる。『市民』という言葉も自分たちには馴染まない。眉つばの眼でみれば、小田実の市民は、古代アテナイの市民にいきなり飛んでしまう。働かない市民、奴隷を使う市民、男だけの市民です。『市民は暴力を振るわない』というのも嘘っぽいし、『市民連合』と言っても、どこに市民がいるんだという思いがありました。／『ベトナム反戦会議』は、東京大学の理学系大学院生を中心につくられました。主力は、山本義隆たち物理の大学院生で、日本物理学会がペンタゴン（アメリカ合衆国防総省）から三億円受け取っているという『米軍資金問題』に取り組みます。アメリカでは財団とペンタゴンが大学を支えていますから、ペンタゴンが日本物理学会に資金を流すのはいわば当たり前のことです。その他にもありとあらゆる団体に資金を流しています。こちらが『反対』と言っても相手はキョトンとするだけです。そういう構造に物意の大学院生たちが反逆していきます。東大全共闘の無党派、ノンセクトの中心はこの物理の大学院生たちでした。その意味では日大全共闘とは毛色が違います」（東大闘争と学生運動）。

その裏では『いのち』が軽んじられた時代でもありません。科学技術の隆盛に乗って『開発』が闇雲に推し進められた結果、『三里塚闘争』が起こりますが、私たちは、そうした『陰』の問題を無視して研究生活に没頭することはできませんでした。／二つめはアメリカの強大な軍事支配が地球上を覆っていたことです。典型的に現れているのは、ベトナム戦争に対して科学技術者が関与した大きな犯罪行為です。六〇年代後半に私たちはその問題に気づき、文献を読み議論をしました。軍事支配下の科学技術はどうなるか、私たちにあってベトナム戦争は、ひとごとではなかった。私たち自身が関与しているという意識で、自分たちの研究を考え、生活を考えることが避けられない状況でした。／三つめは『核』の問題です。『核』と言いますと、核兵器を意味することが多いと思いますが、もう一つ、『原子力の平和利用』という麗しい表現が一九五三年にアメリカのアイゼンハワー大統領によって使われて以来、それがあたたかも当然のごとく受けとられる時代が続きます。原子力の平和利用が可能かどうか。原子力は夢のエネルギーカーかどうか、これも研究者として真剣に向き合うべき問題でした。／そうした六〇年代の末に『ぶるじえ』というグループでいろいろ考え議論しました。ベトナム戦争を強行するアメリカに対して、日本に住む私たちに何ができるか、『ただの市民』という考え方で行動しました。『核』の問題につ

いては、高木仁三郎さんが原子力資料情報室の専従世話人、次いで代表として亡くなるまで全力を尽くした。いま私はその共同代表の一人です。『脱原発』にどのような中身をもたせるかは、今日の問題としてあると思っています』（傍線引用者）。

最後の言葉は〈福島原発事故〉以降の現在、ようやく日本でも〈脱原発〉のうねりが、力強く確認できるようになりつつある今、ますますリアルに実感できるであろう。

今日の〈脱あるいは反原発〉運動の発端も、六〇年代学生叛乱の中に求めることが可能であるという事実は、今こそ想起されるべき事ではないか。

5 〈反核〉・反原発・反天皇制

山口がふれている高木仁三郎の反原発運動との私たちの接触の記憶を、八〇年代に持続された学生叛乱の記録のためにここで書いておこう。

七、八〇年代、私が担った運動課題は高木たちの反原発運動とクロスすることはほとんどなかった。だから高木たちと私たちは親しく日常的につきあうというような関係はまったくなかった。私は一方的に読者として彼の仕事を吸収していただけである（よく、いろいろな読者会のテキストとして読んだ）。そういう関係であったから、最初に彼の方から声をかけてきた時のことはよく憶えている（その

時、彼が高木であることを、私は直後にわざわざ人に確認した）。

それは、一九八二年の反核ファイバーともいべき動きの中での出来事であった。集会場からの帰り（あるいは集会の休息時間だったか）、なんのテーマの集まりであったかは忘れてしまっているが、「いやあ、僕たちがやらなければいけない事をやっていたらいい」。確かこんなふうに彼は声をかけてきた。

七〇年代、私は学生叛乱を通してうまれた、おそまつな「闘争」に対する権力のフレームアップ事件などにささやかに関係しつつ、反弾圧の救援運動の中にいた。そうした活動とともに、私は『批評精神』という雑誌を個人編集する（好き勝手に五冊つくる）という機会を持った。いわゆる「反核運動」の大きなうねりがつくられた一九八二年は、この雑誌編集の時代と重なっていた。私は、この「高揚」の空疎さにいらだち、第三号で「反核運動の内実を問う」という特集を編集した。私はこの作業を通して、〈核・平和運動〉にはじめて積極的にコミットする発言をしたわけである。私のスタンスは、この特集の「巻頭言」に明快に宣言されている。この時代をとりまく運動の思想のムードも理解していただくために、全文を紹介しよう。

——現在、マスコミとタイアップした、反核運動がそれなりに高揚しつづけている。そしてこの動きをめぐって大乱を帝国主義の謀略よばわりして弾圧してきた権力の論理——『連帯』つぶしの論理——と同一であることを考えれば、なにをかいわんやである（米軍の『間接侵略論』とも同一）。／第三は現在の幅広イズムに基づく反核運動のマイナスを具体的に——歴史的総括をふまえて——に対象化した〈反核〉をこそ追求せんとする立場（理念）である。米核が核を日本の基地に持ちこんでおり、それを保障しているのが『安保条約』であるのだから反安保反基地ぬきの反核などというのはありえないし、原子炉が核爆弾の製造工場たりうることは明白であり、平和産業とは軍事のベースを構成するものにすぎず、安全な原発などというのは、何千年何万年にわたって汚染しつづける廃棄物＝放射性物質の毒の問題一つ考えてもマワル、イサン、カクという言葉と同じだとすれば、反原発ぬきの反核などというものは、またありえないのである。／本誌は、第三の立場（運動）の強化を目指して編集された。反・反核イデオロギーの批判、労戦統一の準備舞台となりかねない抽象的反核運動の内実を問うことを媒介とした、真の〈反核〉へのアプローチの試みである。

この雑誌の1部にある座談会「抵抗としての〈反核〉と何か」（池田浩士・菅孝行と私が参加）は、忘れがたいものである。

雑把に三つに分類される意見が登場している。／第一はもちろん、反核兵器・軍縮の一点で思想・信条をこえて幅広い結集をめざす運動理念である。国連軍縮総会へ向けて、原発推進派だろうが、安保肯定派だろうが、すべてを含んだ運動であるということを、全面的にであれ条件つきであれ積極的に評価する立場（理念）である。／第二は、反・反核イデオロギーとでもいべき主張である。反核運動はソ連の利害のための謀略だとか、ファシズムとかいう立場（理念）である。これは正面から反対はできないが、反米・反安保闘争への転化をチェックしようと考えてる自民党の動きと呼応している。この流れの中には反共イデオロギーのエース江藤淳を筆頭に多くの理論家が登場している。そしてその中には主観的には、権力の意向を代行しているとは思えない人間も含まれている。第一のグループのムード的（絶対正義）の反核思想の軽薄を撃ちつつも、そのもつマイナスをまともに対象化することができずに、ファシズムだとか言論報国会だとかの非難の言葉を濫発し、西欧の反核運動はポーランドの『連帯』つぶしのためにあったという誤った分析を提出しつつ、日本のそれらもつばらソ連派の利害にもとづくものだとする吉本隆明の主張がその代表である。それは結果的に江藤たちの主張と合流してしまっている。江藤たちの主張はもちろん、吉本の主張も、ハンガリー動乱らしい『社会主義』権力に対する民衆の叛

て発展していきなきやならない。そういう新しいものを感じますね」(傍線引用者)。

(3・11)以降、三か月の今、福島原発の放射能の垂れ流しは、いつ止められるという展望のないまま続いており、広義の被災者は関東圏を含めて、とめどなく広がっており、今、政府・東電・マスコミへの抗議の声は広く深く高まりつつあり、脱原発・原発の新しい巨大なうねりは、ようやく日本でも力強く実感できるようになってきている。だから、この時、高木に「見えた高揚の雰囲気」は、今、何倍にも拡大したものであるとして私たちにも実感できるようになっているといえよう。

話を一九八八年にもどさなければならぬ。それなりに「高揚」に向かった私たちの反天皇制運動は、正面から象徴天皇制への政治的批判を、という「政治意識の回路」をつくりかえる運動としてスタートしていたのだから、拡大する(反原発・脱原発)運動のスタイルと「行き違う」のは必然であった。八八年以降の数年に続く、反天皇制運動と原発運動の「高揚」は、まちがいはなく背中合わせの構造で進んだ。おたがいの内容とスタイルがよく見えない相互関係が成立するしかない方向で進んだのである。高木のやりとりは、そうなる必然性をよく示している。そして、二人ともその点はかなり自覚的であったことは、六月行動をめぐるやりとりによく示されている。幅広主義が大組織

作を中心に多くの原発批判本が、再版・重版され広く読まれ出し、そのテーマの新刊書籍も目白押しという今の状況の中に、この高木の言葉を置いてみると、それはチェルノブイリ直後の状況のより大規模な再来であることが、よく実感できよう。

私は「ベ平連を繰り返さないとは、どういうイメージですか?」とあえて踏みこんだ質問をしている。高木はこう答えた。

「色々議論になりそう(笑)。僕はベ平連から少し離れた所に居たので、あまり色々言える立場ではないのですが、最終的にいって僕は、ベ平連は一つのサークルの運動になっちゃったと思うんです。『ベ平連派』みたいな形がやっぱりできちゃった。やむをえない状況でもあったのでしようが、具体的達成目標がなくなり、もっぱらその思想性、立場性をよりどころとする運動になった。これは、はっきり言ってダメだと思うのです。／反原発運動も、反原発セクト——いわゆるセクトとは違うんだけど——になっちゃうというこわさはある。つまり反原発という立場性(党派性)を主張するだけの運動となってしまうのはだめでいく運動でないダメだと思えます」。

私は、これに、だとすれば他の運動テーマとの関連について、運動的にどのように考えているのかと問い直してい

にのみこまれてしまった反核運動の歴史的な教訓はどうふまえられているのかという私の質問に答えて、高木はこう主張している。

「ただ、ひとつだけ、今の運動に期待してよいと思うのは、皆ものすごくよく勉強する。本がよく売れるというのもそのことと関係していると思いますが、自分自身の判断力を養うことで、自分なりの行動選択をしている。それは命とか生きるとかいうことへの誠実さから来るもので、大組織の運動に簡単に解消されることはないと思います。／この先のことについて言えば、僕たちは『脱原発法制定』運動という形で原発全体をとめていくような国民レベルでの運動を提起していきたいと思っています。そうはいっても、反原発運動の特徴としては、一つ一つの原発建設計画、下北半島の核燃計画ですとか、プルトニウム空輸だとか、よく考えれば目の玉が飛び出しちゃうような厳しい計画の一つ一つと具体的に向き合うところに一つの原点がある。なおかつ個別ではダメで全体をとめたいということに来ていますから、全国的な運動を目指さざるをえない、さらに言えばベ平連運動の(笑)くり返しでもないと考えています」(傍線引用者)。

高木のいう「命とか生きるということへの誠実」な向きあいは、今、まさに脱(反)原発の運動の大きな広がりの中に強く実感できるものであり、高木自身のいろいろな著る。高木はそれには、こう答えている。

「ただあえて言えば、六月行動みたいな、こういうふうな政治課題を並べちゃうと、わりと手垢がついちゃって(笑)、原発運動の中で出てきた期待感のような『これで世の中が変わる』というイメージが出ていくという要素があると思うんですよ」。

反原発の新しいエネルギーを生かす場所としては「六月行動」はふさわしくないという判断に支えられた言葉であった。実は、私はその点をよく理解できたのである。

——僕は反天連としては、本格的には去年から六月にかかり出したんですが(他にやり手がないということもあったし、自分たちも持ち込みたいテーマもあったのでそうしたんですが)。これでも課題がしぼれてる方なんですよ。僕らが提起したのはテーマの羅列主義はやめた方がいいということだったんです。『反政府』という大枠を作って何でも入れちゃうというスタイルではなく、やりたいことをやっている人たちが集まってテーマを立てるという方向に変えてきた。その限りでおっしゃっていることはよくわかります。——

そのように私は答えている。

高木がここで「ベ平連サークル」の人たちという言い方で考えているのは、おそらく武藤一羊、吉川勇一さらにはいいだももたちのことであろうことは、私にもよく理解で

きた(もう一人、私たちの反天皇制運動の実行委員会に積極的に参加してきて、私たちを「六月行動」に案内してくれた福富節男も含まれていただろう)。ただ、私はかつて「ベ平連」にまったく関係したことはなかったし、高木にそのお仲間のように扱われることはまったく心外であったことをよく覚えている。それに「六月」の政治スタイルへの批判は二人に共通していたのである。この時は、こんなふうに「行き違」っていたのだ。

私は高木の批判にこだわっており、このパンフレットの「編集後記」に、このように書いている。

——私は高木さんをインタビューして、彼に『手垢がついた政治課題』を並べるだけの六月行動という、ときびしい批判をいただいた。／私たち——ここでは反天皇制運動連絡会として六月行動事務局の私たち——は、昨年から、漠然といくつもの課題を並べるだけの六月行動のスタイルとはちがった、自分たちが重要と考えるテーマを鮮明につきだす闘いの合流の場として六月行動をつくりなおすべく奮闘してきているつもりである。／私たちは、自分たちが日常的な課題としていることに持続的に執着し、そのテーマを思想的にも実践的にも深化させていくという作風こそがまず重要であると考えてきたし、きている。そして、その個別のテーマ(それを担う人々)と積極的に交流していくことが必要であると考えているのだ。／課題の単純な

羅列ではなくて、多様なテーマの生々とした交流といった政治的活力をつくりだすこと。これが六月行動が実現しなければならぬことである。——

課題の相互連関の構造の認識を相互に深めるような共闘のつみあげを可能にする政治闘争。この私たちの政治運動の構想は、その翌年までくり返された「六月行動」のなかでうまく定着されず(そもそも年に一回の政治結集というスタイルでそれが実現するわけもなかった)、以後「反天連」は呼びかけ団体からおりることを決定する(結局、その後「六月行動」は消滅に向かっていくことになる)。

この時、サッサと「六月行動」に見切りをつけていた高木たちの「脱原発法制定」を軸にした反原発運動は、その法制定の挫折が象徴するように、「高揚」の持続は短かった(私は、このインタビューで、高木の「社会党」への期待を軸にした法制定運動(永田町政治)に収れんする「政治意識の回路」づくりへの、不安と疑問は少しだけ口にしてる)。

このインタビューは、課題の「相互関係」をどこまでも自覚していく、「お互いがプラスになるような作用のしかた」である関係づくりの必要を二人で確認しておわっている。そして高木は自分の新しい運動の構想については、このように語っていた。

「今までの運動の陥った限界というのは、一つは『個別

闘争一点突破』みたいなのがあって、尖鋭化すると実力闘争にいき、力づくで一敗地にまみれるとポシヤっていく、という構造がある。もう一方で、ものすごく抽象的で訳のわからぬ、『反核』などという政治課題、個別具体性を失った政治課題で、全国民的な署名運動はやるけれどもそれがどうなったかわからない。このどっちかのような気がするんです。この両方でないものを、これからわれわれは目指していかなくてはならないと私個人は考えています。／個別的な一つ一つの計画に対する闘争を一方におきながら、『一点突破』主義ではない、全体の政策をかえ、政治を文化や生き方をも変えていくような総合性をもった運動を追求していきたい。原発ということの一つのチャンスであると思うのです」(注8)。

この言葉は、今の状況において、ますますリアルな提言である。

さて、吉川勇一は『市民の意見』(『市民の意見30の会・東京のニュース、11年6月1日(126)号)の「反戦交友録⑥」で高木についてふれ、こう書いている。

「残念なことに、10年半前に62歳で亡くなられた。今回の福島原発の『人災』も高木さんが強く危惧されたことだった」。

もう一〇年もたつのかという点と、六二歳という点に少々驚いた。私も今年でなんと六三歳になっているのだ。

高木の年を超えて生きている闘病中の自分、すこしシンミリした気分になった。実は彼とのコンタクトは、この時で終わってしまったわけではない。反天皇制運動の私たちの予想をこえた長い「高揚」もとくに終わってしまった後の二〇〇〇年三月二五日に、ガン闘病中の高木が私たちの集会にわざわざ来て発言してくれたのである(この場合の私たちとは、「日の丸・君が代」の国旗・国歌法制化に反対する「共同声明」運動のあと、法制化されてしまったとはいえ、強制への拒否の動きはバラバラに生まれるであろうことを予想し、「共同声明」運動をふまえそれを広くつないでいく運動づくりを目指してつくられた、「日の丸・君が代」強制反対の意思表示の会」の事務局である。私は「反天連」のメンバーとしてそれに参加)。

その集まりは宮下公園(渋谷)で持たれた。「意思表示の会」の立ちあげを上げる第一回目の抗議集会(デモ)であった。高木はこんなふうに話し出している。

「こんにちは、高木です。屋外の集会にはでなくなりましたので、私の名前なんか知らないんじゃないかと思えます。以前はこの宮下公園を、私の巣のようにしていたのですが、この二年間ほどの闘病生活で、屋外集会はもちろん、屋内集会にも、すっかり足が遠のいてしまいました。そういうことで、原発に関する講演もほとんどお断りしてきたので、本当はどうしようかなと思っただけです。け

れども、依頼してきた吉川勇一さんとは『いい人』の仲間の結末みたいなものがありまして（吉川勇一著『いい人はガンになる』参照）、どうしても断れなかったんです。／これは半分冗談で、もちろん吉川さんへの義理で運動やってるわけではない。やはり『日の丸・君が代』というテーマに関しては私自身言わなくてはいけないことがある、そういう思いでやってきました。

そうか、吉川たちと手分けしてこの会の「呼びかけ人」を集めた時、高木に声をかけてくれたのは吉川だった、ということ、このくだりを読みなおして思い出した。

高木はここで、敗戦を小学校一年生（七歳）で迎えた自分は、大人たちはなぜ軍国主義に抵抗できなかったのかと考えた、自分はある大人になりたくない、否応なく戦争にまきこまれた被害者とする大人たちが信用できなかった、それが私の戦争体験の原点にあるものだ、そう語りだした。ところが自分が企業勤めになると、自由に個人としての意見がいえなくなった。このままでは、かつての大人と同じになってしまふ、だから自分の場で一つ一つ抵抗していくことが大切だと思いだした。「あいまいな全体」に取り込まれていくことへの具体的抵抗こそが大切、原子力産業勤めであった私は職場の問題として反原発を始めた。「そういう意味で私にとっての原発問題が、『日の丸・君が代』の問題であり、天皇制の問題である、そういう風に思っ

います」。そのように彼は語り続けた（「あいまいな『全体』に取り込まれず『個』を貫いていこう」『日の丸・君が代』強制反対意思表示の会NEWS・2（00年4月25）号）。

この時、話し終わると司会をしていた私の肩をくんで、耳もとで「ガンバってくださいネ」と高木はささやいた。その時、残されている時間が少ないことに自覚的だった彼が、そういう言葉を吐いた（およそ、そういう態度を示すほど親しい関係ではなかったのだから）のであることは私にもよくわかった。いいようもない痛々しい気持に私は落ち込んだことをよく覚えている。

今回八八年のインタビュとニュースに残されたこの時の発言を連続して読みなおして、高木は背中あわせでともに「高揚」した時期をはさんで、別々に少数派の闘いとしてねばり強く持続されている反原発運動と反天皇制運動の、相互の関連する構造について、あらためて高木（反原発）の方から明示的に確認するために私たち（反天皇制）の方に、病をおして足をはこんでくれたのだ。

そのことが、ハッキリと認識できた。

さて、〈3・11〉から三か月の今、私たち「反天連」も、いろいろな運動団体とともに「福島原発事故緊急会議」の中におり、脱（反）原発の全国的なうねりを実感できる動きの中を走り出している。今度こそ、反天皇制という「政治意識」の固有な通路を手放さずに、国家のあいまいな「全

体」につつまこむ管理支配に抗する反原発の闘いを持続しなければなるまい。それは私にとっては——いきていれば高木にとっても——〈六八年叛乱〉の持続である。

〈注1〉「コメンタール戦後50年」は第七巻が「科学技術とエコ

ロジー」の巻である（一九九五年、社会評論社）

〈注2〉この点は、かつての新左翼イデオログとしてはもともと「高名」であり続けた吉本隆明が、ひどく攻撃的な反・反原発論者（科学の進歩絶対の〈科学性善〉論者）であり続けていることに象徴されよう。

〈注3〉この時代の作業をふまえ、私は「科学・技術」問題に関して書いた論文が「講座 現代と変革」の第四巻『現代科学技術と社会変革』（一九八五年、新地平社）に収められた「戦後、革新派」の科学思想批判——思想史の方法と視点の問題にそくして」である。

〈注4〉私は『市民の意見』（市民の意見30の会・東京）のニュース、11年6月1日（126）号）に『もうひとつの全共闘——芝浦工大全学闘1968-1972』（芝工大闘争史を語る会編、二〇一〇年、柘植書房新社）と『路上の全共闘1968』（三橋俊明、河出ブックス）、『1968年文化論』（四方田犬彦、平沢剛編著、毎日新聞社）の二〇一〇年に刊行された三冊の書評を書いている。

〈注5〉『連続講義一九六〇年代 未来へつづく思想』（二〇一一年、岩波書店）。これは慶應大学での「現代社会史」の講義をベースに編まれた本である。

〈注6〉八〇年代の池田浩士との交流については、私は『IKEDA HIROSHI / 2004 PAST & PRESENT』（二〇〇四年）に「池田浩士との八〇年代」という文章を書いている。

〈注7〉『批判精神』第三号「反核運動の内実を問う」（一九八二年六月刊）。

〈注8〉この一九八八年の「六月行動」のためにつくられたパンフレットのタイトルは『安保をつぶせ！6月共同行動』である。

〔天野恵一（あまのやすかず） 反天皇制運動連絡会〕